

彦左衛門の屋敷に行つて御覽になりますと、彦左衛門は、

『只今御覽に入れます』

といつて慥らえた鼠を五六匹出しますと、側に居た五六匹の猫が夫を見て、吾先きにと争ふて、啣えて行つて仕舞つたので、殿様もこれには、吃驚して、屋敷へお歸りになりましたが、後で、よく聞いて見ますと、その五六匹の鼠といふのはみな鯉魚節で造つたものでしたとさ。

### 一休のおはなし

一休といふ坊さんは、今から大方五百年も前の方で、小さい時の名を千菊丸と申しますが、六歳の時、京都の紫野の大徳寺といふお寺に這入つて、其處のお住持のお弟子になつたのであります。性

質がまことに、伶俐でしたから、お經でも習字でも、他のお弟子が十日もかゝつて覚える事は、一日で覚えて仕舞ふ、年長の坊さん達のまだ知らぬ事でも、一休はもうちやんと知つてるといふ位でしたから、和尚様も大層可愛がつて大事に育て、居りました。

所が、ある日の日、このお寺へ、獸の革袴を穿いた一人のお武士が尋ねて参りました、一休は、夫を見て、大急ぎで、一枚の半紙へ次の様な事を書いて玄關へ張り出しました

此お寺では、獸の革の類は堅く禁制なり、若し革の物入る時は其身に必らずばち當るべし  
お武士はこれを見て

『この小僧生意氣な事をする、己が革の袴を穿いて居るもんだから、こんな事を書いて、己を困ら

せようとするのだな、よし／＼方からも困らせてやらう』

と考へて、一休の側に來て、

「あい／＼、小僧や、お前このお寺に草の類禁制と書いたが、この寺に在るあの太鼓は革で造つたものじゃないか、どうだい小僧、」

といつて、これには困つたらうといふ顔で居ると、一休は、平氣なもので

『えー、太鼓は鞆の革で造つて居ます、だから御覽なさいこの通り、ばちが當るじやありませんか』

夫なら、一番巳の

といつて、太いばちで以てとんどこ とんどこと



たゝきながら

『どうです、あなたもこの太鼓の様にばちをあてゝ上げまじょうか』

お武士もこれには一言もなかつたので、頭を搔いて、

『なる程、これは一番やられたわい』

と言ひながら、心では

『よし／＼覺えて居れ、今度己の家へ來たら此度仕返しをしてやるから』

と思ひながら、其日はそこ／＼

に歸つて仕舞ひました。

夫から二三日もたちましてから、今度は一休が和尚さんのお供をして其武士の家へ参りました。すると、其門の前の橋側に一本の制札が立つて居る

『このはし渡るべからず』

和尚さんは、これを見て

『どうしよう小僧、この橋を渡らねば、彼方の家へ行くことが出来ないが』

といつて困つて居ますと、一休は

『和尚さま、構ひませぬから、まんなかを通つて行きませう、』

さあ、私が先に立ちますから』

といつて、橋のまんなかを、大手を振つて通つて参りました。夫を見て、前のお武士が、中から飛

んで出て、

『こりやく小僧、あの制札が目に入らぬか、

何故このはしを渡つたのだ』

と叱りますと、一休は

『はし渡るべからず』とあったから、この通りまんなかを渡つて参つた』

と答へましたので、さすがのお武士も舌を巻いてこの小僧は中々豪い、とても己などは叶はないといつて感心しました

(まだわり)

### 魚の感謝状

日本海の海の底で、くじらだの、ふかだの、さめだの、まぐろだのを、かしらにして、其他、いはしや、わじや、たこや、いかなどいふ大勢の魚たちが、より集つてお話をして居ます。

『やれく、去年の二月から、大分人間の御馳走が、落ちてくるといふ話だつたが、大方は満洲に